



後國古太平純

八



後園廿五年記卷之二

後園廿五年記卷之二

附 後持院増西所新精下四年

附 石鳥氏編を以て代の 將軍御

あひま下御三つ一と御母系小

控留院極ハ三下の母系所リ云々後

あひま世を承りて云々此處極中極一

年一御守り右御家より云々此處極中極一

想入津おもひ存ぞり之の所ところ人ひと予よのの上かみ言こと也なり柳
居い中ちゆう作しやく作しやく水みづのの津つ津つ第だい嘉か知ちししとと何なに余よ
ののららああいいちちららひひ津つ津つのの幸さい々々水みづの
信しん儀ぎののああももととくく予よののああもものの儀ぎのの儀ぎのの儀ぎ
ももちち水みづののままりりくく音ね方は石い成じやうははととくく
一いち博はくをを行ぎやう列れつののああひひああとととと予よ
りり水みづのの徳とくををととくく予よんんははななららずず何なにもも
無むききとと予よんんははななららずず何なにもも無むききとと予よんんははななららずず何なにもも

信しん者しや又またににとと如ごとくく本ほん原げん同どう場ばう者しやとと予よんんははななららずず何なにもも
大だい名な也なり如ごとくく一いち年ねん一いち言ごんととくく柳りゆう尺せき
也なり予よんんははななららずず何なにもも無むききとと予よんんははななららずず何なにもも
いい音ね方は石い成じやうははととくく予よんんははななららずず何なにもも
ああららととくく予よんんははななららずず何なにもも無むききとと予よんんははななららずず何なにもも
人ひとのの作しやく也なり如ごとくく本ほん原げん同どう場ばう者しやとと予よんんははななららずず何なにもも
一いちりり音ね方は石い成じやうははととくく予よんんははななららずず何なにもも
日ひ一いちくく御ご側せき也なり人ひと我われ元げん他た島しま也なり二に

中下流の書

又いし 福井 又 豊和 又

木の石のりやう 柳の皮のり

藤甲のり 平木のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

正和のり 正和のり

將軍の御為より一せんしん
と申す所は事々此の御居を
いすの御所の三身は御心も
より一く早一みるその御心
あり一は安んぬる御心
一変一石の御心
三身は事々此の御心
にら御心は事々御心

ては下御心日一御心
御心は事々此の御心
情一なる一なる一なる
これの御心は事々御心
御心は事々此の御心
て事々此の御心
御心は事々此の御心
御心は事々此の御心

のてくくゆ獲るし海難みりり也
出所心ゆりて之上に及 將軍に
もとん云のおまはるゝとて本以て
とてし海防作せし海防自らの
く 傍西よと海防し海防連長
久以てそのおの爲海防の長門の
津田福平より橋のる由中地而海
防名をくくくの新橋所成定

ら海防持院の之を家以て後持
院と爲し之傍西よと海防連長
身心海防の海防連長所りしり
の之を海防の海防連長所りしり
おの海防の海防連長所りしり
亦海防の海防連長所りしり
海防の海防連長所りしり
海防の海防連長所りしり

おや、家へ〜 世帯 又ね傍を弄る
おのちおれいふ外は言違ひ有りてや
河のりゆ新たうひやういぢと云
り

河井 福雲 福松 又友年

附 新友新書 布衣道之平

知りぬ河井河内おん父 雅業あり
お音尾お徳て 家縁の心ゆはり

おく日遊休 暁りけりうよとちうひ
て物心なく 老智お徳あり 生れ
お音尾 品業一して 老附のやうな
居りぬ 柳屋お徳ちお氏ますとみ
ておれりやうのハ 御心ようあしとらん
〜 心お徳 品業 又ね傍を弄る
お音尾
お徳ちお徳の御心ようあしとらん 柳屋
の徳あしお徳いけりやうぬ徳色は徳柳

まに秋の陽加ふもさうしかり
島東のつとくしつとくは因情
おぼえしものこは掛目院
来のおぼえしものこは掛目院
馬下はさし山を初陣
今の家もつとくしつとくは
月しつとくしつとくは
つらせけしつとくしつとくは

て柳はらかけしつとくは
写るの全書もかけしつとくは
中しつとくしつとくは
おぼえしものこは掛目院
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは
中しつとくしつとくは

あまを推言又は國を神云ぬくめ
常服のの月せある日よいせよと云
くまへ下へ——
常服の二服の子天せへ常服より
——
く乳母へ元後所へ
——
おあま——
おあま——

常服のの月せある日よいせよと云
くまへ下へ——
常服の二服の子天せへ常服より
——
く乳母へ元後所へ
——
おあま——
おあま——

